イケメン記者の大物の予感！

no.24

盛り上がったE&Wヤング

井上泰宏（いのうえ・やすひろ）
1986年生まれ　37歳
福岡県北九州市出身。大学卒業後ボートレース関係の会社に就職。2015年から日刊紙記者として若松ボートを担当後、20年から芦屋ボートに常駐。趣味は釣り。車のシート下に餌が転がり込んだことに気づかず、しばらく異臭を放ち続けたのがトラウマ。

若手のレースは面白い

ヤングダービーへの最後の勝負駆けでもあるレースが、イースタンヤングとウエスタンヤング。今年はイースタンヤングが多摩川、ウエスタンヤングが芦屋で行われました。芦屋は周年が昨年度は８月に行われましたが、今年度は２０２６年の１月開催、そのため今年の最も注目度の高いと言ってもいいレースでもありました。大会連覇中で地元の大将格と見られていた新開航選手やＳＧ覇者の定松勇樹選手、ＧＩ２Ｖの末永和也選手、そして昨夏に芦屋周年でＧＩ初Ｖを果たしていた入海馨選手ら主力と見られていたレーサーが軒並みＦ休みで出場できないという状況に、開幕前はやや小粒感が否めないメンバー構成でしたが、始まってみれば何とも面白いレースの連続でした。売り上げの面でも１日早く始まった多摩川のイースタンヤングの37億円には届かなかったものの、複数のＦがありながら目標である30億円を突破したことがその証明にもなるでしょう。若手のレースが盛り上がるのはボート界の発展へは欠かせない要因のひとつ。選手の努力あってこそですが、将来は明るいと言えるのではないでしょうか。

スピード水面で面白さ倍増

昨年はイン１着率が60％を超えた芦屋ですが、ウエスタンヤング開催中のイン１着率は47％。抜きや恵まれでの１着もあったので、逃げでの決着は43％。それに対してまくりが25％、差しが10％、まくり差しが11％でした。予想も舟券もかなり難しく、良くも悪くも「う～ん」とうならせられるレースが盛りだくさんでした。逃げにまくり、まくり差しを含めた差し決着と、様々な決まり手が飛び出すレースが面白くないはずがありません。

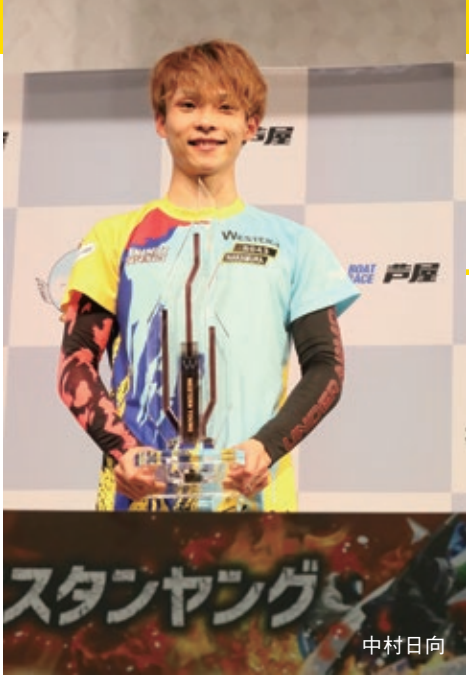
そんなウエスタンヤングを優勝したのは中村日向選手。最終日の午前中に同期で同じく優勝戦に駒を進めていた中亮太選手と足合わせを行っていた時には、中選手に伸びでちぎられていました。それもあって「伸びをつけようとして調整した」そうです。「出足の方が良くなっていましたね」と思ったような仕上がりにはならず苦笑いも見せていましたが、その出足も優勝を引き寄せた要因の一つになりました。優勝戦の１号艇は同じ香川支部の後輩である西岡顕心選手。「お互い手の内を知り尽くしているので、顕心は僕がまくり差しに行くと思っていると考えていました。その裏をかくイメージでまくりに行ったのがうまく決まりましたね」。豪快なターンで西岡選手を引き波に沈め、一気に前に進んだのは出足の良化があったからでしょう。

業界の牽引役に！

中村選手は登録番号５０００番台初のＧＩ覇者で、今節唯一のＧＩウイナーでもあったので、終わって見れば順当な結果だったとも言えるでしょう。デビューから４

中亮太と中村日向

富田怨生



中村日向

年9か月で四国地区選を制した若手の旗手は、5月地元まるがめのオールスターで2度目となるSGの舞台を経験。そこで「今の僕がSGで活躍するため、そして勝つためにはまだ2万個ぐらい壁があることが分かりました」と、冗談交じりではありながら真のトップレベルとの差を痛感したことを語ってくれました。「業界を引っ張っていく選手になる」ために操縦や調整の技術だけでなく、ボートレースへの取り組み方から考え方をアップデートしている最中だそうです。

産みの苦しみの先に…

これから先、SGやGIを主戦場として戦っていくことを目指して戦うルーキーたちが思い悩む姿もありました。昨年まで芦屋でフレッシュルーキーを務めていた富田怨生選手もその1人です。「このままじゃソコソコの点数は取れてもそれまでの選手で終わってしまうと思ったんです。中野仁照選手と一緒になった時に触発されたこともあって、ターンを変えようと取り組んでいるんですけど難しいですね。感覚が狂ってしまっています」と現状を打破するために、もがき苦しんでいます。もっとも、ウエスタンヤングはエンジンに苦しんでそれどころではない状態でもありました。初日からシリンダー交換の大整備を2度行い、そのほかにもキャリアボディーにキャブ電気にピストン、リングを交換。最後の最後に換えたクランクシャフトが当たって「ようやく回転が上がるようになってきた」という時に、接触で新ペラ交換になってしまい調整をやり直しと大忙し。新たな試みがうまくいかないことと低調機のダブルパンチをくらうシリーズでもあったのです。

ただ、元々「メンタルの弱さはトップクラスです（笑）」と自嘲気味に自身でも認める大きな課題を抱えながら、「心は折れていないですよ。仁照からも『1年は続けてみてください』と言われましたからね」と落ち込むどころか前を向いていました。「仁照は『自分が一番練習しているって自信を持って言える』ぐらいボートレースに誠実に向かい合っているんです。さぼっているつもりはなかったけど、比べると僕は足りなかった。どうなるか分からないけど、自分にもできると思って1年間は続けてみます」。どんなことでも変革には産みの苦しみが伴うもの。富田選手は光るセンスも持ち合わせているだけに、進化に対する期待も高まるというもの。その時を楽しみに待ちたいと思っています。

師弟？　それとも同志？

ウエスタンヤングが終わり、若松のオールレディースにも取材に行ってきました。意外にも2年ぶりの優勝だった堀之内紀代子選手は、前回の優勝も若松のオールレディース。前回の優勝は5コースからのまくりだったのに対し、今シリーズは予選2位通過から優勝戦1号艇が転がり込んできての逃げ切り勝ちでした。優勝インタビューもそうだったのですが、しきりに「仲道（大輔）師匠のおかげです」と語っていたのが印象的でしたね。チルト3の師匠とあがめる仲道選手がチルト0用のペラゲージなども堀之内選手のために用意してくれて、「ペラを師匠のゲージに合わせて叩いただけです」と最敬礼でした。

堀之内選手は師匠と表現するのですが、「同志」といった方がしっくりくる関係性です。中村選手にとっての中選手や同支部の西岡選手、中野選手と富田選手の関係性も近からず遠からずといったところでしょう。同世代のルーキーたちが水面でやり合うバチバチの戦いを楽しむ傍ら、お互いが高め合う姿勢も楽しむことができるのもボートレースの醍醐味です。

堀之内紀代子